「デカンショ」によせて

高橋克也（埼玉大学教養学部准教授・哲学）

「デカンショデカンショで半年暮らす、あとの半年寝て暮らす。」このデカンショ節なる歌を旧制高等学校の学生たちが愛唱していたことはよく知られている。もともと丹波篠山の民謡で、「デカンショ」の元来の意味については諸説あるようだ。しかし、学生たちにとっては、それはデカルト、カント、ショーペンハウエルの三哲学者のことであり、この歌は彼らの学問的情熱と自負が託された歌である。彼らは「哲学書は必読書」という意識を持っていたのであり、その心は、何をやるにせよ自分にとって最も本質的なことに精力を傾注したいという渇望であっただろう。他方、「あとの半年寝て暮らす」というくだりには、本質を究めることさえ忘れなければしゃちほこばって生活する必要はないという、自由の気風が感じられるのである。

少し解説しておくと、デカルト（17 世紀フランス）は、「われ思う、ゆえにわれあり」の言葉で有名な哲学者であり、権威を盲信せず何事も自分の理性で一から考えてみるべしという考えを実行した人である。カント（18 世紀ドイツ）はというと、理性の重要性を説いただけでなく、理性の限界を見定めようとした人である。その結果、デカルトがまだ執着していた神、魂、無限といったものについて、その存在を証明しようとしても無理であると結論することになる。そうしたものはあくまで理想なのであって、理想は無限であるべきだが思考は実証的であらねばならない。それがカントの言おうとしたことである。

それにしても、デカルト、カントの次がなぜショーペンハウエル（19 世紀前半ドイツ）なのだろうか。この時代を代表した哲学者と言えばヘーゲルであり、他方、ヘーゲルに対する一方的な敵愾心を燃やしながら、時代の表舞台に出ることのついになかった日陰の哲学者がショーペンハウエルだ。彼の書物が学徒たちの必読書に数えられていたのは、「デカンショ」という語呂のよさにも当然よるだろうが、ほかにも理由を考えることができるだろうか。

第一に、「この世は幻のようなもの」という厭世的な認識と感情を分かりやすく美しい言葉で綴ったこの人の文章は、不条理に敏感な青年たちの琴線に触れるものであったに違いない。そして第二に、ヨーロッパにおいて、実証的科学が大きな成果を積み上げていた 19 世紀半ば以降、その裏側でこの厭世哲学者の思想が隠然と存在感を誇り、支持者を得ていたという事実がある。日本人が西洋の学問を学び始めた 19 世紀末、明治の知識人がショーペンハウエルを手に取る環境は確かにあったわけである。私は以前、夏目漱石の研究をしている人の手伝いをして、こんな発見に立ち会ったことがある。『吾輩は猫である』に「天然居士」という早世した哲学徒の話が出てくるが、そのモデルである米山保三郎が行っていた研究もショーペンハウエルの空間論に関するものだったのである。

さて、今回の展示資料はデカンショたちの書物とその翻訳書、研究書であり、旧制浦和

高等学校の蔵書の一部である。これらの書物を眺めていると、デカンショの時代よりむしろ、これらが出版され、購入された昭和前期の空気が伝わってくるようだ。特に感慨深いのは、太平洋戦争のさなかにも哲学の研究書が出版されていることである（たとえば桂寿一『デカルト哲学研究』1944 年)。戦中の学生たちには、これらを納得いくまで読むことを望んだ人がたくさんいただろう。しかし、文科系の学生・卒業生たちが「学徒出陣」（1943 年）で戦地へ送られ、学問への欲求を貫徹しないまま散っていったこともまた人の知るところなのである。『きけわだつみのこえ』（岩波文庫）を読むと、彼らが書物や思索への消せない渇望を抱えていたのがよく分かり、まことに痛々しい。中には、当時の一高校長であった安倍能成への敬愛の情をうかがわせる手記や手紙なども出てくる。本展示でも安倍能成の手になるカントの訳書を見ることができるはずだ。

戦争に直面したのはもちろん日本人だけではない。ここにある洋書の著者・編者たちの中にも、重要な態度決定を迫られた人が少なくなかったのである。たとえばブルーノ・バウフ（Bruno Bauch）という人は、この著作（『イマヌエル・カント』1921 年）を刊行する少し前、反ユダヤ主義の考えを新聞に寄稿したために学界で大きな非難を浴びていた。といっても、すべてにおいて偏狭な人物だったわけではなく、新しい数学・物理学を踏まえてカント哲学を再検討する姿勢を持っていた人でもある。論理実証主義の中心人物カルナップが一時その門下にいたのもバウフのそうした傾向ゆえであった。（論理実証主義はナチスから疎まれた哲学の潮流であり、関係者は亡命したり学生に射殺されたりしている。）ここにはまた、エルンスト・カッシーラー（Ernst Cassirer）の編集したカント全集の一部があるが、カッシーラーはユダヤ人であったため 1933 年以降亡命を重ねて、アメリカに定住することになる。

こうして戦前・戦中のごく一断面を見ただけでも、ある疑問が浮かんでくるのを禁じえない。慌しく、生命の危険を自覚せざるをえない世の中でも、人はなぜ学問を通して物事を根底から考えようという欲求を失わないのだろうか。それは、真理が多数決では決められないものだからだろう。そういう真理というものを愛する人は、世の中がどこへ向かおうと、その愛を捨てられないものなのである。「半年寝て暮らす」というのは、つまりは、時流に流されて自分を失うことへの疑問の意識である。「デカンショ節」の不思議な含蓄はそのあたりにある、と私は考えている。

[図書館と県民のつどい埼玉 2009（2009 年 11 月 28 日(土)開催）展示説明]